

主 題：十字架で為された「最高の交換」**聖書箇所：コリント人への手紙第二 5章21節****テーマ：イエス・キリストの十字架が成し遂げたものは一体何だったのか？**

かつて17世紀頃に活躍し、イギリス賛美歌の父とも呼ばれたアイザック・ワッツは、その生涯において数多くの讃美歌を作りました。その彼の作った讃美歌の一つを、きょうも私たちは賛美しました。それが、一曲目に歌った讃美歌「栄えの主イエスの」です。この曲の中にこんな歌詞が綴られています。もう一度よく聞いてください。「栄えの主イエスの十字架を上げば 世の富誉れはちりにぞ等しき 十字架の他には誇りはあらざれ この世のものみな 消えなば消え去れ …ああ主の恵みに報ゆるすべなし ただ身と魂とを捧げてぬかずく（ぬかずく「額を地面につけるようにひれ伏すこと」）」立ち止まって少し考えてみてください。果たして私たちは、今のことばを心から賛美としてささげたでしょうか？「十字架のほかには誇りはありません。この世のものはみな、消えるなら消え去ってしまえ。」と、そう本当に心から私たちは歌っていたのでしょうか？果たして私たちは、キリストの十字架をほかの何よりも愛し、それにふさわしい感謝を、喜びを今現しながら歩んでいるのでしょうか？

思い返せば、かつての信仰者たちはまさにそのように歩んでいました。特にあのパウロは何度も何度もそのことを口にしていたのです。例えばIコリント1：23「しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。」と。また彼はガラテヤ6：14でもこのように言っているのです。「しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。」と。もちろん彼にとって、そのメッセージを語るのが容易だったわけではありません。もう皆さんもご存じのとおり、彼はそのメッセージのゆえに多くの迫害を受け、痛みを覚え苦しみ、また最後にはいのちを落とすこととなりました。しかし、たとえどんなことがその身に起こったとしても、十字架の本当の価値を知っていた彼は、その真理を話すのを止めることは決してありませんでした。最後の最後まで大胆に、十字架だけを誇りとして歩み続けていたのです。

きょう私たちが一緒に見たいみことばは、そんな彼が記したことばIIコリント5：21です。おそらくこれまでに皆さんも一度は読んだことがある箇所ではないかと思います。でも同時に、この箇所ほどキリストの十字架が成し遂げたその最高のみわざ、「最高の交換」とも人々の間で呼ばれるその真理を私たちにわかりやすく教えてくれる箇所はない、と言っても過言ではありません。ですから、いま一度パウロのことばから、キリストの十字架の持っているそのすばらしさを、今回は特に四つの側面、要素から考えてみましょう。今週私たちは、キリストの十字架を覚える受難週をも迎えます。どんな時も主の犠牲に絶えず感謝して、十字架を誇る者として歩み続けていくために、ぜひ神様のことばに心を留めてみましょう。

IIコリント5：21

「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方において、神の義となるためです。」

○十字架上での”最高の交換”：四つの要素**1. 救いの神様 21 a 節**

まず一つ目に注目したい要素は、「救いの神様」です。よくみことばを見てください。21節はどのように始まっていました。「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。」と。いったいだれが、罪を知らない方イエス・キリストを、私たちの代わりに罪とされたのでしょうか？いったいだれが、すべてのはじまりだったのでしょうか？それは、ほかのだれでもない、神様でした。救いの計画を立

てたのも神様。救いの計画を実行されたのも神様。福音は初めから終わりまでそのすべてが神様の働きでした。ただ父なる神様が、ご自分の御手を先に差し伸べてくださったわけです。けれど、もし神様が御手を差し伸べてくださらなければ、私たちはだれひとりとして救われることなどあり得ませんでした。どうしてか？みことばははっきりと教えています。生まれながらの私たちはみな例外なく、みずから神様を拒み逆らい続けていた、そんな罪人だったのです。ローマ3：10-12「義人はいない。ひとりもない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行う人はいない。ひとりもない。」と。また、そんな神様の敵として歩む私たちにとって、神様や十字架の話はどれも愚かなものにしか思えないものでした。たとえキリストについて耳にしたとしても、自分とは何の関係があるのか私たちにはわかりませんでした。みことばはそのことをはっきりと教えています。Iコリント2：14に書いていました。「生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。」と。あまりにもそれが馬鹿げた話にしか聞こえないからこそ、だれもそれを望もうともしませんでした。私たちはみななかくに神様を求めようとせず、むしろ自分の欲に走り、神様の忌みきらわれる罪に罪を重ねていたのです。だからこそ、私たちはみな、生まれながらに神様の御怒りを受けるべき子らでした。聖く正しい神様のさばきのみが値する存在だったのです。エペソ2：3にもこう記されていました。「私たちもみな、かつては不従順の子らの中であって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」こうしてみずからの意志で滅びへと突き進んでいた私たち。そんな罪深い私たちには、自分たちの努力や行いによって救いを手にすることなど到底できませんでした。頑なになってさまよい続けていた私たちには、だれかが代わりに手を差し伸べてくれる必要があったのです。それを成し遂げてくださった方こそ、まさに神様だったのです。

確かに救いのご計画は、すべて神様がそのはじまりでした。そんな救いの神様の姿を聖書の別の箇所でも見て取ることができます。例えばイザヤ59章にもその姿が鮮明に記されていました。ぜひ時間のある時に59章をすべて読んでくださればと思いますが、9節からこのように記されています。「：9 それゆえ、公義は私たちから遠ざかり、義は私たちに追いつかない。私たちは光を待ち望んだが、見よ、やみ。輝きを待ち望んだが、暗やみの中を歩む。：10 私たちは盲人のように壁を手さぐりし、目のない者のように手さぐりする。真昼でも、たそがれ時のようにつまずき、やみの中にいる死人のようだ。：11 私たちはみな、熊のようにほえ、鳩のようにうめきにうめく。公義を待ち望むが、それはなく、救いを待ち望むが、それは私たちから遠く離れている。：12 それは、私たちがあなたの御前で多くのそむきの罪を犯し、私たちの罪が、私たちに不利な証言をするからです。…」と。公義を求めようにも、救いを求めようにも、それらははるか遠くに離れていると。でもその状況をご覧になった主の取られた行動が、その続きの15節から記されていました。特に15節の後半にこう書かれています。「…【主】はこれを見て、公義のないのに心を痛められた。：16 主は人のいないのを見、とりなす者のいないのに驚かれた。そこで、ご自分の御腕で救いをもたらし、ご自分の義を、ご自分のささえとされた。」もちろんここで預言者イザヤは、特にイスラエルの民の罪深さを描いていました。あまりにも多くの罪を犯した彼らの心は腐りきっていて、公義も、救いも、彼らから遠く遠く離れていました。想像できますよね。まるで目の見えない人が手探りで何かを探し求めようとしてもどうにもならないように、イスラエルの民が自分たちで神様の義を探し当てることなど、絶対にできなかったのです。文字どおりその状況の中において、彼らには何もできませんでした。でもそんな時に、神様が働かれました。彼らにはできないことを、神様がなされました。神様が心を痛め、ご自分の御腕で彼らに救いを、義をもたらされたのです。

そして皆さん、まさにこれと同じように、私たち自身もまるで暗闇の中を目のない者のように歩んでいました。神様に罪を犯し、正義から遠く離れていたそんな私たちには、自分自身の何かによってその救いにたどり着くようなことなど、到底不可能でした。でもそんな愚かな私たちに対して、神様が光を

照らし、神様が救いの御手を差し伸べ、神様がご自身の義というものをもたらしてくださいました。救いの創始者は神様でした。最初から最後まで、神様ご自身がその働きの中心だったのです。

そしてこれは私たちに大切なことを教えてくれます。それは、イエス様が十字架にかかって死なれたのは、究極的にはユダの裏切りのゆえではなかったということです。イエス様を憎んだパリサイ人たちの悪意のゆえでもありません。イエス様の尋問を行っていたピラトの臆病さ、恐れゆえでもありません。実際にイエス様のからだに手をかけたローマ兵の残虐さのゆえでもありません。イエス様が十字架で死なれたこと、それは、ただ罪人を救おうとくださった神様のご計画に、イエス様がみずから進んで従ったゆえだったのです。つまり、ほかのだれでもない、父なる神様でした。神様が御子を十字架につけられました。神が罪を知らないお方を私たちの代わりに罪とされました。それが神様のみこころだったのです。イザヤもはっきりとこう口にしていました。イザヤ53：10「しかし、彼を砕いて、痛めることは【主】のみこころであった。」と。

決して忘れてはいけません。このイエス様こそ、父なる神様に完全に従われたお方でした。この方こそ、父なる神様ご自身が、何度も何度も「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」（マタイ3：17、17：5ほか）とそう告げられたお方でした。でもそんなお方が十字架で砕かれたわけです。いったいどうして神様はこのようなお方を十字架につけたのでしょうか？いったいどうしてこの方を砕くことが、ご自身を喜ばせるみこころだったのでしょうか？いったいどうして私やあなたのような愚かでかたくなな罪人のために正しい御子は苦しみ死なれたのでしょうか？その答えをみことばが教えてくれました。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。」エペソ2：4-5「4しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、5罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなた方が救われたのは、ただ恵みによるのです。——」どうしてそんなことをなしてくださったか？それは、神様ご自身の愛のゆえでした。私たちのうちにその救いに値する何かがあったからではありません。ただご自分のその大きな恵みとあわれみのゆえに、人には決してできないことを神様が成し遂げられたのです。ほかのだれでもない神様こそが救いの計画を立て、それを実行する力と知恵を持っておられたお方でした。そしてその救いの神様がご自分の御手を先に差し伸べてくださった、というわけです。あまりにも感謝なことだと思いませんか？でもこれで終わりではありません。

2. 罪のない救い主 21b節

二つ目に注目した要素、それは、「罪のない救い主」です。21節はこのように続いていました。「神は、罪を知らない方を、」と。ここでパウロは、キリストのことを「罪を知らない方」というふうに表現していました。これはいったいどういう意味なのでしょう？鍵になるのは、ここで登場した「知らない」ということばです。これには、「何かを個人的な体験や経験を通して知っている」という意味を持つことばが使われていて、ここでは、そのことばの前に否定を表す冠詞が付けられています。つまり、ここで「知らない」とパウロが口にしたとき、彼は単に知識や概念として罪を知らない、という話をしていたのでもありません。むしろこの方以上に、罪が何なのか、その存在が何なのかを知っているお方はいませんでした。でも同時に、そのキリストが罪を個人的に経験することはなかったのです。この方は罪とは何ら関わりを持たない、そのうちにいっさいの罪を見出すことのない、そんな完全で、聖い、罪を知らないお方だったのです。そしてこのことは、ほかのみことばも同じように明らかにしてくれていることでした。例えばイエス様ご自身もはっきりと口にされていました。ご自身に敵対する者たちに対して、次のような問いを投げかけておられたのです。ヨハネ8：46に「あなたがたのうちだれか、わたしに罪があると責める者がいますか。…」その問いかけに答えることができた者はだれもいませんでした。また、イエス様だけがそのことを知っていたのでもありません。イエス様の周りにはいる者たちも、弟子

たちも、この方の罪のなさに気づいていました。そのことを認めていました。だからこそ、彼らはこのように証言していたのです。よく聞いてください。ヨハネはこんなふうに言っていました。Ⅰヨハネ 3：5「キリストが現れたのは罪を取り除くためであったことを、あなたがたは知っています。キリストには何の罪もありません。」ヨハネだけではありません。ペテロもこう言います。Ⅰペテロ 2：22「キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。」またそれに加えてヘブルの著者もこんなふうに述べています。ヘブル 4：15「私たちの大祭司は私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。」と。これを聞いてこんなふうに思う人がいるかもしれません。そりゃ、当の本人やイエス様の弟子たちはそう言うに決まっている。自分や自分を慕う者たちが悪く言うはずはないでしょう…と。でも、そうではありません。この方の罪のなさを覚えていたのは、何もイエス様の弟子たちだけではありませんでした。イエス様の姿を目の当たりにしていた敵たちも同じようにその事実気づいていたのです。例えばイエス様の取り調べを行った総督ピラトはこんなふうに述べていました。ヨハネ 18：38に「ピラトはイエスに言った。「真理とは何ですか。」彼はこう言ってから、またユダヤ人たちのところに出て行って、彼らに言った。「私は、あの人には罪を認めません。」と。ピラトだけではありません。イエス様の十字架での死を目の当たりにしたローマの百人隊長も同じでした。彼もこんなふうに言うのです。ルカ 23：47にこう書いていました。「この出来事を見た百人隊長は、神をほめたたえ、「ほんとうに、この人は正しい方であった」と言った。」そして皆さん、何よりあの主を裏切ったイスカリオテのユダもこのように言っていました。マタイ 27：4「私は罪を犯した。罪のない人の血を売ったりして。」…と。みことばが示していること、それは明白でした。イエス・キリストは罪を知らないお方だったのです。立ち止まって考えてみてください。この方は私たちとは違います。確かに数多くの誘惑を受けることもありました。しかし、誘惑に負けて罪を犯すことなど一度もありませんでした。一度として誤った考えを抱くこともなければ、悪意を覚えることもありません。一度として人を傷つけるようなことばを発することもなければ、愛のないふるまいをすることもありませんでした。キリストはどんなときもどんな場面にあっても、いつも父なる神様のみこころに完全に従い続けたお方でした。その歩みのすべてにおいて父なる神様を喜ばせ、いっさい欠けたところを見出すこともできない、そんな罪を知らないお方だったのです。そして、そのお方が、私たちの代わりに十字架にかかられました。罪を知らないお方であること、それはまさに救いにおいて絶対に欠かせないことでもありました。どうしてか？それは、このように罪を知らないお方だけが、唯一私たち罪人の代わりに罪となることができたからでした。罪のないお方だけが、私たちの罪を代わりに背負い、身代わりとなって十字架で死ぬことができたのです。そしてそれが、私たちが三つ目に注目した要素とつながっていきます。

3. 代わりに背負う罪 21c節

三つ目の要素は、「代わりに背負う罪」です。このように記されてきました。21節の続きにこのように記されてきました。「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。」と。あまりにも簡潔に書かれているので読み流してしまうかもしれません。でも驚くべきことが言われていました。神様は、罪を知らないその救い主を、私たちの代わりに罪とされた、と言うわけです。正しい神の小羊が、罪を知らない神の御子が、私たち罪人の身代わりとして罪とされた、というわけです。もちろんここで勘違いしてはいけません。キリストが「罪とされた」というのは、キリストが私たちと同じように罪人になったということでは決してありません。十字架にあって、父なる神様が、完全で聖いこの御子をそうでない者にされたということではありません。もしこの方が少しでも罪に汚れていたのであれば、身代わりになることなどできませんでした。

では、神様が罪を知らないキリストを私たちの代わりに罪とされたとは、どういう意味なのでしょう？それは、あの十字架にあって、父なる神様は、私たちが犯したすべての罪を、まるでキリストが犯

したかのように扱われたということです。キリストが実際に罪を犯したのではありません。罪を犯していたのは私たち自身でした。しかし父なる神様は、私たちの負っていたすべての罪をキリストのうちに移し、そして、キリストがそのすべての罪を代わりに負って十字架で苦しみ死なれたのです。かつてスポルジョンもこの出来事に関してこう口にしていました。「キリストは無罪であり、罪人とされることもあり得ませんでした。しかし、この方は罪人の代わりとなることを望み、まるで罪人のように扱われました。そうです。キリストは罪人として扱われただけでなく、まるで罪そのものであるかのように扱われたのです。これは驚くべき言葉です。罪のない方が罪とされたのです。罪は私たちの偉大な身代わりをひどく苦しめました。キリストはゲッセマネの園でその重みを感じ、「汗が血のしずくのように地に落ちました。」そして、その全ての重圧は、呪われた木に釘付けにされた時に彼の上ののしかかりました。数時間の暗闇の中で、彼は私たちが語ることのできないほど多くのものを耐え忍ばれたのです。」(チャールズ・スポルジョン) 改めてよく考えてみてください。キリストはいっさいの罪や過ちを犯すことのなかった存在でした。しかし、そんなお方が、私たちの代わりに十字架で罪とられました。キリストはどんな時もみことばに忠実に歩み続けられた存在でした。しかしそのお方が、私たちの代わりに罪の罰を受けられました。キリストはいつも父なる神様が喜ばれることだけをなし続ける存在でした。しかし、そんなお方が、私たちの代わりに罪に対して燃え上がる父なる神様の御怒りを味わい、激しい悲しみと苦痛にさいなまれたわけです。忘れてはいけません。本来であれば、罪の罰も御怒りも、痛みも苦しみもそのすべてが、罪人である私たちにのみ値するものでした。罪を知らないお方にふさわしいものは一つとしてありませんでした。しかしそれにもかかわらず、罪のないキリストは十字架の上で私たちの代わりに砕かれたのです。ほかのだれでもない神の御子が偉大な身代わりとして、私たちのすべての咎をその身に背負ってくださったのです。イザヤもそのことをはっきりと述べていました。イザヤ53:4-6「4 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。:5 しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。:6 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、
【主】は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。」またペテロもこの箇所を引用して同じように口にしていました。Iペテロ2:24「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。…」と。こうして罪のないお方が、私たちの代わりに罪とられました。自分自身はいっさい何もしていないのに、まるで自分がそれを犯したかのように、キリストは私たちのすべての罪をその身に負われたわけです。私たちの犯した過去の罪だけではなく、今の罪も、またこれから先将来に犯す罪も、そのすべてをこの方は背負われました。そしてそんな罪を背負った御子が十字架の上で、ご自分が愛するその御父の手によって砕かれたのです。いったいどんなに大きな痛みを御子は抱いたでしょう？永遠の初めから変わらずに知り続けていたその御父の愛ではなくて、激しい怒りを覚えたその時、どんなに深い悲しみを覚えたことでしょうか。イエス様も口にされていたのです。皆さんも覚えていると思います。マタイ27:46「わが神、わが神。どうして私をお見捨てになったのですか。」と。間違いなく私たちには想像もできないほどの苦しみをこの方は味わわれました。本来なら、その罪もその罰も御怒りも、私たち自身が受けるべきものでした。しかし、罪のないこの方がその罪の罰やさばきを代わりに受けてくださったからこそ、燃える神様の御怒りはなだめられたのです。皆さん、キリストは確かに私たちにはどうすることもできなかったことを成し遂げてくださいました。ほかのだれでもない主ご自身がみずから進んで十字架にかかり、私たちが支払うべきその罪の代価を支払ってくださったわけです。だからこそ皆さん、今このキリストにあって、私たちは神様の赦しを得ることができます。身代わりとしてご自分のいのちをささげてくださいましたそのお方を信じる者に、神様の贖いが、神様の救いがあると確信することができます。罪を知らないお方がそれに値しない私たちの代わりに罪となって、私たちの罪を拭い去

ってくださったと。私たちはそこに、神様の愛を、救い主の愛を、そして何より罪の赦しの希望を見出すことができるのです。素晴らしいことだと思いませんか？感謝できることだと思いませんか？

でも十字架のみわざは、これですべてでもありませんでした。もし、罪の赦しで終わっていたとすれば、十分ではありませんでした。まだ「交換」がなされていなかったのです。どういうことか？少し思い浮かべてみてください。確かに私たち今見てきたように、キリストを信じるすべての者のその罪は、キリストのうちに移されます。まるで、罪に汚れていた汚い服を私たちが脱いで、そしてそれを罪のないキリストへと手渡すようです。でもそのままであれば、私たちはまだ裸のままです。そんな私たちは何かを着る必要がありました。罪が赦されているだけでなく、聖く正しい神様の前に受けられる何かを代わりに身にまとっている必要があったのです。

4. 義とされる信仰者 21 d 節

それこそが最後四つ目に注目したい要素、「義とされる信仰者」でした。もう一度21節を見ると終わりにこのように記されています。「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。」その後「それは、私たちが、この方において、神の義となるためです。」ここで「神の義」ということばが出てきました。この「神の義」というのは、簡潔に言えば、「神様ご自身を特徴づける正しさ」であったり、「義」のことを表しています。どんなときも曲がることなく、いつもまっすぐで正しいことをなそうとする、そんな神様の特徴を表しているのです。そして重要なのは、皆さん、この義なる神様は、ご自分と交わりを持つとうとするすべての者に対して、同じ義を求めておられるということです。だからこそ、です。だからこそ、神様の前に、ただ私たちが無罪であるだけでは不十分でした。もちろん罪の赦しも必要です。ただ、それだけでは神の国に入ることはできませんでした。それに加えて、神様の求めておられる完全な義というものを、それぞれの歩みが満たしている必要があったのです。覚えていますか？そのことをほかのだれでもないイエス様ご本人がはっきりと教えておられました。あの山上の説教でマタイの5章にこんなふうに載っています。マタイ5：20「まことに、あなたがたに告げます。もしあなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国に、入れません。」そして同じ5：48にこうあります。「だから、あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。」と。言われていたことは明白でした。私たちはみな、天の父が完全であるように、完全でなくてはならなかったのです。それが神様の求めておられた揺るがない基準でした。私たちは完全でなくてはならないのです。でも実際の生活を振り返ってみれば、どうでしょう？残念ながら私たちはそんな歩みなど到底できていません。すべての面で神様の前に従順で喜ばれることをなしていくのに、私たちは難しさを覚えるのです。罪深い私たちの努力や行いでは、神の義を得ることは決してできませんでした。皆さん、私たちは自分の力でこの義を得ることはできませんでした。だれかがそれを代わりに与えてくれることがなければ、私たちには何の希望もなかったのです。でもそれを恵みによって与えてくださったお方がおられました。私たちにはできないことを成し遂げてくださったお方がおられました。その方こそ、人としてこの地上に来られ、最後まで父なる神様に従順に完全に従われたイエス・キリストだったのです。そしてこの従順な方が、私たちの代わりに罪となり、十字架の上で死んでくださったからこそ、この主を信じるすべての者は、ただこの方において、神様の義が与えられるわけです。パウロもこんなことを述べていました。ピリピ3：9にこう書いてあります。「キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。」皆さん、これこそが「最高の交換」でした。改めて考えてみてください。十字架で成し遂げられたその偉大なみわざに心を留めてみてください。確かに私たちは罪深い者でした。しかしその罪のすべてを御子が代わりに十字架で負い、罰を受けてくださいました。その逆に、御子は聖く完全で従順な者でした。そしてその完全な義を、私たちに代わりに与えてくださったわけです。

こうして、かつて着ていた罪に汚れていた衣服を脱ぎ捨て、私たちは純白の義の衣服を着せられました。ただ神様のあわれみと恵みのゆえに、私たちは罪を除かれただけでなく、神の義までもが与えられたのです。そして、そんな救われた私たちを今聖い神様が見るときに、そのようにしてキリストのうちに入れられた私たちを聖く正しい神様が見るときに、そこには罪ではなくて、聖く傷なく非難されるところのない姿を私たちのうちに見出すわけです。決して、自分の力や行いで達成したことではありません。何か私たちのうちにそれに値したものがあるのでもありません。ただ神様の愛のゆえに、十字架の犠牲がすべてのことを成し遂げてくださいました。イエス・キリストの愛のみわざのゆえに、私たちは今、義とされ、御前に立つことができますのです。キリストのうちにあって罪を赦された者として、私たちは神様との平和を持って歩いていくことができますのです。私たちにはできないことを、神様が成し遂げてくださいました。

そうだとすれば、この事実は私たちの心に大きな感謝をもたらさないでしょうか？この事実は私たちのうちに賛美を生み出さないでしょうか？このキリストの十字架は、私たちがただ誇りとするものではないでしょうか？そしてこんなにもすばらしいみわざを目の当たりにしたなら、どうでしょう？果たして私たちはそれにふさわしい歩みを今しているのでしょうか？すでに罪を赦された者として、罪との戦いを経験しながらも、キリスト似た者へと成長したいと願っているのでしょうか？神様が忌みきらっておられるその罪を自分自身も忌みきらって、神様が何よりも愛しておられるその正しさを、その義を自分自身も愛して追い求めようとしているのでしょうか？

もしまだこのキリストを自分のこととして信じ受け入れていない方がおられるなら、どうかきょうこの方に助けを求めてください。あなたを罪から救い出すことのできる唯一の方に、その方の愛とあわれみを求めてください。みことばははっきりと教えています。いつの日か必ずそれぞれのした行いに応じて、神様がすべてに報いられる、正しく応じられるその日がやって来ます。キリストのうちにいなければ、必ずそのうちに神の御怒りが注がれる、そんな日がやって来ます。だからこそ、今まだ機会がある時に罪を悔い改めて、このイエス・キリストを自分の救い主、主として信じ受け入れてください。この方にすべてをゆだねて、信頼して歩む歩みをどうか始めてください。

また、もうすでにこのキリストの十字架のみわざを信じ受け入れておられる兄弟姉妹の皆さん、あなたにとってキリストの十字架だけが誇りとするものでしょうか？皆さんは心から賛美することができるのでしょうか？「栄えの主イエスの十字架を上げば 世の富誉れはちりにぞ等しき」と。「十字架の他には誇りはあらざれ」と。「この世のものみな 消えなば消え去れ」と。忘れてはいけません。あわれみ深い神様は、罪を知らない方を、罪を知らないご自身の御子を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためでした。このキリストの偉大な十字架を覚え続けることです。この偉大な十字架のみわざに心から感謝しながら、ますますともにこの主を礼拝する者として歩み続けていきましょう。